The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	直観はいかにして表現されるか : ベルクソン的直観の表現へ至る歩み
Author(s)	中村, 雅之
Citation	年報人間科学. 1989, 10, p. 15-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八九年三月〕
『年報人間科学』第十号　一五頁―三一頁

直観はいかにして表現されるか

――ベルクソン的直観の表現へ至る歩み――

中村雅之

直観はいかにして表現されるか

――ベルクソン的直観の表現へ至る歩み――

序――本論の戦略――

ベルクソンの直観が論じられるとき、まず基準になるテクストとしてつねに言及されてきたのは、言うまでもなく『形而上学入門』（以下、『入門』と略記）である。この論文においてベルクソンの「直観」が初めて確立したという点のみならず、ベルクソンが自らの哲学的方法である直観について系統的に述べた最初の論文が『入門』であるのだから、このテクストが重視されることには十分すぎるほどの理由がある。しかし、その一方で、直観についてのベルクソン自身の考え方がその後、発展を見たこともあって、『入門』は直観に与えた明晰すぎる定式（直観とは、事物を外からではなく内から捉える絶対的認識であり、記号による翻訳を排除する）によってかえって誤解を生むもとになった。ベルクソンの直観が（特にそれに反対する者によって）『入門』をもっぱらにして論じられる場合、その実像は著しく歪められてしまう。例えば、このテクストには「対象のもつ独自のものと、従って表現しえないものと合致するために対象の内部に身を移す手段である共感を、ここで直観と呼ぼう」（PM, 181）という周知の一節がある。ベルクソン的直観の簡潔な定義としてしばしば引用されるこの命題から、次のような推理を引き出すのは容易である。直観は対象の内部にあるものとの合致である。対象の内部にあるものは、その対象独自のもの、それゆえ表現しえないものである。（表現は言語によってなされるが、言語が表現するものはこの対象に独自なものではなく、この対象と他の対象とに共通なものであるから）。したがって、直観が把握するものは表現しえない。ギュンターが言うように「たいていの者はここで袋小路にぶつかってしまう」[1]。ここからベルクソンの直観は言語の形であれ何であれ一切の表現を排除した認識である、との結論を導くのはたやすい。なるほど、ベルクソン自身が明言している通り、直観そのものを表現するのは不可能だということは認めなければならない（「イマージュによって内的生命を表現することはできない（PM, 185）」）。しかし、だからと言って、直観はいかなる意味でも伝達しえないと、いわんや伝達する必要のないものであるとベルクソンが考えていたことにはならない。それどころか、後年の『哲学的直観』には次のような文章を見ることができる。「（…）われわれ自身の内部に降りて行こう。われわれが触れる点が深ければ深いほど、われわれを表面へ押し戻す圧力も強くなるだろう。哲学

的直観とはこの接触であり、哲学とはこのエランである」(PM, 13)。哲学とは直観を得ることに尽きるのではなく、それをもう一度表面に押し戻す営み、すなわち直観を表現する営みである、とベルクソン自身が考えていたことがここから分る[2]。直観はついに近似的にしか表現できないとしても、われわれの手持ちの道具の中には、その表現に最も適したものがある。ベルクソンはそうした道具として「流動概念」を挙げた。それゆえ、われわれが解こうとする誤解は、ベルクソンの直観はどのような意味でも概念を必要としないという誤解である。そして本稿でわれわれが提出する問いは、「直観とは何か」ではなく、「直観はいかに表現されるか」である。先の引用に即して言えば、本稿が扱うのは、われわれの内部に降りてゆく直観の過程ではなく、そこから表面に押し戻される過程、すなわち直観を表現する過程である。

『入門』に重点を置くベルクソン的直観の解釈が誤解に導かれがちなのは、このテクストが、ベルクソンが直観について語ったものであるからだと考えられる。ベルクソンの直観を理解するには、ベルクソンが直観について反省的に、あるいは回顧的に語っていることよりも、他ならぬ直観の成果であるはずの彼の哲学の歩みを見た方がよいとわれわれは考える。『入門』とともに、直観を主題にしたもう一つの論文「緒論」において直観について語られているところは、彼のそれまでの哲学の回顧であることを忘れてはならない。それならば、そのものとしては言表しえない直観について語られたことよりも、直観が現に演じられているテクストを手掛りに直観に近づく方が得策ではないだろうか。そして、これは他ならぬベルクソン自身が『哲学的直観』においてバークリーとスピノザの直観を捉えようとして採用した方法なのである。ベルクソンの直観を、その産物である彼の哲学的言説を通して把握すること、これが本論の戦略である。

さて、その場合でもベルクソンの直観がもつ基本的意味だけは、念頭において置かねばならない。これについてはベルクソン自身が明言している。直観の定義はさまざまであるが、「にもかかわらず、根本的な意味が一つある。すなわち、直観的に考えるとは、持続において考えることである」(PM, 30)。われわれはこの命題の意味を、最後の節で考察するつもりである。

一、既成の概念と思考の逆転

周知のとおり、『入門』において、直観は分析に対置されている。ベルクソンの言う分析とは、ある対象を「既知の要素」に分解ないしは翻訳する営みである。あるいは、新しい対象をすでに知られている対象とできるだけ多くの点で関係させようとする作業である。「分析とは、対象を既知の要素に、すなわちこの対象と他の諸対象に共通なものに還元する操作である」(PM, 181)。ここから分るように、ベルクソンの場合、分析は単に全体を要素へ分解するという点で、直観に対置されるのではない。分析が直観と対照的なのは、既知の要素への還元という点なのである。持続を分析しようとする

ことは、それを「既成概念に分解しようとする（PM, 207）」ことである。また、ベルクソンは「形而上学が本来の形而上学そのものであるのは、概念を超えるときだけである（PM, 188）」と言ったすぐ後に続けて「あるいは少なくとも硬い、既成の概念から解放されるときだけである（ibid.）」と概念に関して限定をおこなっている。それゆえ、直観を得るには「思考の概念的方向（PM, 199）」を逆転しなければならない、と言われるときの「概念」とは、あらゆる概念ではなく、ただ既成の概念だけを指すと解釈しなければならない。この点を見落とすと、直観はあらゆる概念的表現を拒絶するという誤解に陥ってしまう。（事実、後に見るように直観は流動概念によって表現されるのである。）

このような既成概念は、後の「緒論Ⅱ」では、「日常の概念」les concepts usuel（PM, 89）、習慣化した概念であると規定されている。日常概念の第一の役割は、直接の、あるいは未来のわれわれの行動に呼びかけることにある。つまり日常概念は、事物がわれわれに対して何をしてくれるのか、またわれわれがそれに対して何をすべきかを告げる概念である。したがって、日常概念は事物の全体のうち、われわれの行動に、事物の有用性にかかわる側面しか照らし出さない。こうした日常概念を無批判に哲学にもちこむと、第三節で見るように、誤った立てられた方をした哲学的問題が生じる(3)。直観とその表現は、このような既成の、日常的な、習慣化された概念を超えるための方策である。「このような哲学は、しばしば既成の対象に関する社会的ヴィジオンに背を向ける」（PM, 64）(4)。

既成概念はまた、「緒論Ⅱ」では「すべてのものを要約する概念」とも言われている。この概念には、実体、自我、理念、意志といったさまざまな名がつけられているが、「すべてが与えられている」とする点で共通している（PM, 26）。ここから、既成概念に対置される流動概念とは、事物を〈持続の相の下に〉把握する概念であることが推測できる。われわれは第三節でこの点を具体的に明らかにする。

以上から明らかなように、『入門』で語られる直観はあらゆる概念的表現を拒否しているわけではない。なるほど、同時に『入門』には、あらゆる記号を排斥する叙述が見えることも認めなければならない(5)。しかし、このような徹底した反記号主義(6)は八年後の『哲学的直観』（以下、『直観』と略記）に至って修正される。『入門』では、分析はある対象の外側から視点をとり、対象を他のものに翻訳する営みであるのに対し、直観は対象の内側へ入り込むのだから、いかなる視点も必要とせず、対象の翻訳でもないとされていた。ところが『直観』では、直観のこうした反記号的側面は背景に退く(7)。『直観』のベルクソンは、『入門』で排斥した視点や翻訳について語り始めるのである。『入門』では、直観を表現する必要はないとされていたのに（註(2)参照）、『直観』では、その表現のために紙幅が費やされている。それを象徴するのが直観とわれわれとの仲立ちをする「媒介的イマージュ」の登場である。媒介的イマージュとは、「具体的直観の単純性とそれを翻訳する抽象的観念との中間にあるある種のイマージュ（PM, 119）」である。それは、過去の哲学者

がもっていた直観（これ自体を伝えることはできない）に対して解釈者が「取るべき視点」を教えてくれる。解釈者の心に浮かぶこれら媒介的イマージュはさまざまであるが、「同じ原典から異なった言語によってなされる二つの翻訳が等しいように（PM, 130）〔傍点は引用者〕」、過去の哲学者がもっていた直観に等しいとされる。『入門』から『直観』へ至るベルクソン的直観のこのような発展を考慮せず、『入門』の反記号主義の定式だけを強調するとき、ベルクソンの直観が表現へと至る歩みは見失われてしまうのである。

さて、既成概念による認識を退け直観をわがものとするには、思考の習慣的方向を逆転させなければならない、とベルクソンは言う。対象を直観によって把握し、そこから二つの対立概念の融和を理解するには、「知性の習慣的働きの転倒に取りかからなければならない（PM, 198）」。この知性の逆転とはどういうことなのか。まず、知性とは生活に役立つことを目指す働きであり、利害を離れることがない。つまりその第一の目標は功利性にある。功利性とは、事物をその固定的な姿において捉え、行動の支点とすることにある。この目的を果たすために、知性は既成の、固定した概念を道具にする。われわれの日常生活は、このような固定した、既成の概念を併置し、調合することによって営まれている。生活に役立つこうした既成の概念によって、知性は経験あるいは実在を再構成しようとする。哲学的概念は、本来ならば功利的観点を度外視した概念であるはずなのに、このような日常生活の功利性に汚染されている。既成概念によって事物を再構成するという「こうしたやり方を哲学に移しかえることは（…）概念から事物へ向かうことであり、（…）一定の利害に動かされた認識の仕方を利用することである」（PM, 199-200）。既成の概念から実在へ――これが知性の習慣的方向である。（第三節で、このような既成概念をベルクソン自身の著作から拾いあげるつもりである。）従って、その逆転とは、実在から概念へと向かうことである。すなわち、既成の概念に頼るのを止めて、行動には役立つその固定性を廃し、新しい概念によって既成のカテゴリーを改編し、実在の曲折を辿ることに他ならない。こうした新しい概念をベルクソンは流動概念と呼んだのである。

さてこのような逆転がなしとげられたとしても、直観の表現への歩みは始まったばかりでしかない。すなわち、直観を表現する際の障害が取り除かれたにすぎない。そこで次に、直観がどのようにしてこのような新しい概念を獲得するに至るのか、その過程を追ってみよう。直観の概念化を推進するもの、それは『知的努力』で述べられた力動図式である[8]。

二、直観と知的努力または力動図式

ムレロは直観と力動図式の関係を論じて、「直観は知性作用の過程そのものを潜在的に含んでいる」、「直観から知性作用への移行の場合、この〔移行に必要な〕時間は、図式の発展の時間、図式が概念へと変形する時間であろう」と指摘している[9]。この指摘を

導きの糸にして、われわれは直観の表現過程を『知的努力』（一九〇二年、以下『努力』と略称）に展開されている力動図式の側面から解明してみたい。

『努力』論文において「力動図式」は、想起、解釈、理解、問題解決、発明など広範な知的活動の際に働いているとされる。図式は、「独特で、単純かつ不可分な表象（ES, 160）」であり、頂点と底面をもつピラミッドになぞらえられている。右のさまざまな知的活動に共通する図式の働きは、ピラミッドの頂点から底面への運動である。頂点は、例えば理解の場合、一挙に把握されるものとしてある意味であり、われわれはその頂点から個々の語へと降下してくるのだとされる。われわれは意味から語へと向かうのであって、その逆ではない。

この力動図式について語られたことと、ベルクソンが直観について語ることとの間には密接な関係がある。例えば、『入門』には次のような一節がある。「（…）私は見込みのある意味をまず思い浮かべる。それゆえ、私は一つの直観を手に入れ、そしてまさに直観から、あるものの表現を再構成するような要素的記号へと降下しようとしているのである」（PM, 192. 傍点は引用者）。また、同じテクストに「この独自の直観からさまざまな概念に降りてゆくこともできる。」（PM, 197. 傍点は引用者）とも述べられている。直観について語られたこの「降下」の比喩は、力動図式をごく自然に想起させる。ここから直観の表現過程とは、力動図式の頂点から底面へと「降下する」過程である、すなわち意味から記号への分散過程であると予想できる。ベルクソンが拒否するのは、要素的記号ないし概念から出発して、事物を再構成しようとする態度である。認識の過程はこの逆方向に、すなわち事物から記号ないし概念へと向かうべきだと言うのだ。したがって要点は、事物から概念へという方向であって、記号的ないし概念的表現の全面的拒否ではない。今の引用から明らかなように、直観は記号と無関係であるどころか、最後には記号へと「降下する」のである。前節で見た、反記号主義の定式（「形而上学とは記号なしですまそうと望む学問である」）が登場する他ならぬ『入門』にこのようなテクストが存在することは、直観がいかに表現への傾斜を含むものであるかを、はっきりと示している。

さて、このような力動図式による直観の表現過程は具体的にはどのようになされるのだろうか。まず指摘しなければならないのは、この図式の他ならぬ力動性である。「イマージュが既成のものとして、静止の状態でわれわれに与えるものを、図式は生成において動的に提示する」（ES, 188）。われわれの関心から言えば、この場合、イマージュは既成の概念を表わすと考えられる。「固定した輪郭をもつイマージュは、すでに存在したものを描く（ibid.）」とされているからである。とすると、図式は既成概念を流動概念へ転化する契機を含んでいると考えられる。『努力』でワルツの習得について語られている箇所は、この転化の営みについて有益な示唆をもたらしてくれる。ワルツを習得しようとするとき、われわれはすでに身につけている要素的運動を利用するのだが、このような運動を「その

ままの形で利用するわけではない。多少とも修正し、各運動をワルツの運動一般がとる方向に曲げなければならない。とりわけ、これらの運動を新しい仕方で組み合わせなければならないのだ。」（ES, 182）ところで、このワルツの習得過程に関する叙述は、単に身体的習慣の獲得に止まる話ではない。ベルクソンの考えでは、ワルツの習得のような身体運動にかかわる事例は、想起、解釈、発明などの知的活動のモデルを成しているのである。図式およびイマージュの果たす役割は、身体運動においても知的活動においても基本的には変わらない。右の引用文の「要素的運動」を「既成概念」に置き換えるとき、引用文はそのまま直観の表現過程を描写する文とみなすことができる。われわれは直観を表現する際、既成概念を利用する。しかしその利用は、さまざまな既成概念の形に手をつけず、単にその組合せを変えることに尽きるのではない。努力を伴う直観の表現は、既成概念を「修正し」、直観の指し示す方向に「曲げ」、「新しい仕方で組合わせる」作業である。（このとき、既成概念の示す抵抗が努力感を生む。）力動図式は、このような修正、新しい形への変換、あるいはイマージュの取捨選択によって新しい概念を表現する装置である。すでに述べたように、直観の表現は図式の頂点から底面への降下であるが、それは単に潜在的なものが顕在化する過程ではない。それは創造の過程でさえあるのだ。（次節で取り上げる「イマージュ」という概念は、まさにイマージュという日常概念のベルクソンによる再創造である。）

このような創造の側面は、図式とイマージュとの往復運動としても表現されている（ES, 181-2）。図式からイマージュへの発展は、一度ですまない場合がある。類似した多数のイマージュが競合し合っていて、図式がどのイマージュへ発展するか決められないからである。こういう場合には、図式の方も変容を被る。ここからも分かるように、力動図式は意味から表現へと向かう運動であるが、これはあらかじめ存在する意味なるものをそのままの形で取り出すことではない。図式自体も変化するからである。

以上のように、直観は力動図式によってその表現を獲得する。しかし、その結果獲得された表現は通常の、あるいは既成の概念の形では与えられない。すでに触れたように、それは「流動概念」として表現されるのである。この流動概念の検討が次節の課題である。本節でなされた検討から、力動図式による直観の表現へと至る歩みは、既成概念によって固定的に把握された実在の分節を、新たに改編し直す営みであると言うことができる。ここから流動概念は、このような改編を担う概念であることが予想されるだろう。

三、流動概念

前節から明らかなように、ベルクソン自身も、たとえ近似的であるとは言え、直観を表現することは可能だと考えていた。そしてその表現は流動概念による。しかし、他ならぬ直観を表現する流動概念は、日常のあるいは既成の概念とは出自を異にする以上、それとは明白に異なるものでなければならないだろう。流動概念は、通常

の概念と異なるどのような特徴をもつのだろうか。前節では、力動図式によって既成概念を改編する一般的過程が示された。しかし、具体的にどのような概念が既成概念を改編するのか、またいかなる点で改編するのかを指摘しなければ、ベルクソンの主張も一般論に止まるしかないだろう。ところで、ベルクソンが流動概念の例として挙げているのは、微積分だけである（PM, 214）。われわれはこの例をモデルにして、他ならぬベルクソン自身の著作のうちに流動概念を探してみようと思う。彼が流動概念について語っているテクストではなく、彼がまさに流動概念を使用しているテクストを検討することによって、この概念の具体相を捉えることができると考えるからである。

まず流動概念について語られているところを見よう。流動概念は、既成概念、すなわち「凝固した、ばらばらの、動かない概念」（PM, 218）とまさに反対の性質をもつ。第一に、既成概念の固定性に対して、流動概念はその名の示すとおり、「柔軟で、よく動く、ほとんど流動的な表象」である（PM, 182）。第二に、ある対象と他の対象に共通なものを表現する既成概念に対して、流動概念は、適用される対象にだけ適している概念、したがってほとんど概念と呼ぶのが困難な概念である（PM, 197）。すなわち「実在のあらゆる曲折を追うことができる（PM, 213）」概念である。

このような流動概念の例としてベルクソンは、微積分しか挙げていない。第二節で述べたように、流動概念は思考習慣の逆転の産物である。「微積分は他ならぬこの逆転から生まれた」（PM, 214）。なぜなら、微積分は、既成のものではなくできつつあるものを追い、量の発生を辿り、運動をその変化しつつある相のもとで捉える方法であるからだ（ibid.）。

さて、以下にわれわれはこの微積分に関する叙述を手がかりにベルクソンの著作から流動概念を拾いあげようとするのであるが、わたしの見るところ流動概念は少なくとも三種類ある。それぞれは、対立する二項があるとき、それらを融和させる三つの方策に対応している。まず、対立物を同一物の関数として導出するというやり方がある。イマージュがその例になる。二番目は中間項を置く、ないし新たな項をつけ加えるというやり方である。媒介的イマージュ、記憶イマージュなどがそれに当たる。三番目が、一方を他方の「極限」とする道である。例としては、緊張と弛緩を挙げることができる。

まず最初の例から検討してゆこう。このタイプの流動概念は、流動概念に分析を加えた数少ない例であるパリアントの論述から明らかにされる。彼はベルクソンが挙げた流動概念の唯一の例である「微積分」を手がかりに、『物質と記憶』の中に二つの流動概念を見ている。一つは、可能的行動としての知覚であり、もう一つは運動図式による記憶の現実化である。ここでは前者を見ておこう。ベルクソンは、われわれの知覚（例えばピンの知覚）がなぜ、定まった瞬間に感情感覚（ピンで刺される痛み）に転換するかを次のように説明する。彼にとって知覚とは可能的行動である。つまり、知覚は、知覚者にとって、来るべき脅威ないし利益を象徴している。この可能的利害が現実のものとなる瞬間、すなわち知覚されるべき対象が

自らの身体そのものになる瞬間、それが知覚が感情感覚に転換する瞬間だと言うのである（MM, 52-59）。可能的行動である知覚は、それとは本性的に異なる現実的行動である感情感覚から無限小の距離で隔てられている。この距離を越えるとき、知覚はそれとは本性上異なる感情感覚に転化する。このように、本性上「異なった二つの対象をその違いのままに捉えることができる」[19]概念が、流動概念なのである。

ここから分るように、流動概念の最大の効用は、従来の哲学の教説では対立し合い、融和しないとされた二項を互いに推移できるようにすることにある。ベルクソンの独自性は、このような「本性の差異をもつ二項の移行可能性」とでも呼べる考え方にある。ふつう本性の差異をもつ二項は、まさにその差異のゆえに互いに他へ移行できないと考えられがちである。ところが、ベルクソンにおいては、そのような二項も移行しうる。ただし、移行は強度の、あるいは量の増減にはよらない。本性上異なる二項が、その差異を保ったままで一方から他方へ移行する。この点が、流動概念の眼目である。そしてこのようなことが可能なのは、二つの項を言わば「持続の相の下に」捉えた結果に他ならない。

この点で、流動概念とはものごとを空間ではなく、時間の関数として捉えるための装置であると言える。空間は妥協のありえない対立概念を生み出す[11]。空間は排他的な相互外在性の図式であるからだ。「時間の関数として」とは、パリアントの例では、知覚を未来の（それゆえ可能的な）脅威とみなし、それに対して感情感覚（痛み）を現在の（それゆえ現実的な）脅威であるとみなすことである。ベルクソンが、対象をその持続において捉えなければならないと言うとき、それは単に事物の本性は持続にあるのだから、それと共感しなければならないということだけでなく、このように時間の関数として事物を捉える思考法を指していると考えられる。「序」の末尾で述べたように、直観とは「持続において思考する」ことに他ならないのだから、その表現である流動概念が以上のような特性をもつのも当然である。流動概念とは、単に移ろいやすいもの、不定形なものを捉える概念ではない。それは、事物を時間の「関数」において捉える概念である。そして、そのことによって空間的思考では、移行不可能であった二項の間が移行可能なものとなるのである。

ところで、流動概念が直観の表現であることを示す特徴は、以上のようなパリアントが指摘した点には止まらない。対立する二項を推移可能なものにする直観の戦略はもうひとつある。それは、既成の考え方では本性の差異があるとされていた二項の間に、実は程度の差異しかないことを示すという戦略である。そのときから二項は推移しうるようになる。ただしこの場合移行は、程度の差異による。つまり、そこでは量の増減によって推移がなされる。『記憶』の第一章に登場する「イマージュ」はまさにこのような役割を担う概念である。イマージュは、本性の差異があるとされていた事物と表象との間に、程度の差異しかないことを明らかにする仕掛けなのである。それゆえ、われわれは「イマージュ」を流動概念の例として挙げたい。そのために、『記憶』の第一章をテクストに、イマージュ

を中心に展開される語り方、さらには問題の立て方を以下に挙げ、どのような意味でそれらが直観の表現となりえているのかを明らかにしよう。これらはすべて、「既成のもの」をベルクソンの直観がどのように改編していったか、その歩みを示している。『記憶』の第一章で、流動概念である「イマージュ」を中心として展開する論述においては、ベルクソンが後年、直観について語ったことが現に演じられているのである。

「イマージュ」が直観の表現であることについては、ベルクソン自身の示唆がある。『思想と動くもの』の「緒論Ⅱ」で彼は『記憶』を回顧してこう語っている。

「実在論は、精神のある種の習慣を哲学者たちのうちに作り出した。その習慣のせいで〈主観的なもの〉と〈客観的なもの〉は、両項の間にどんな関係が立てられようとも、どの哲学学派に属する哲学者によっても、ほとんど同じように判定されてきたのである。これらの習慣を放棄することは、極度に難しかった。ほとんど苦痛に近く、つねにやり直さねばならない努力を続けるうちに、わたしはこの難しさに気づいた（…）。」（PM, 83）。

第二節から明らかなように、ここで述べられている既成の思考習慣を放棄する努力（思考の習慣的方向の逆転）は、直観を獲得する過程そのものである。そして『記憶』では、この習慣を破るために、他ならぬ「イマージュ」が導入されたのである。それゆえ、引用のすぐ後の文章で述べられているように、この習慣のせいで「イマージュ」の説は他の哲学者から不分明だと非難された（ibid.）。『記憶』でイマージュが改編しようとする既成のカテゴリーは、「事物」と「表象」である。事物でも表象でもないイマージュとはどのようなものか。J. Theauの次の簡潔な定式がそれを語ってくれる。「ベルクソンにとって、事物の存在は、われわれがそれについてもつ意識に、あるいはもちうる意識には還元できないものである。しかし同様に彼は、この存在が意識と根本的に異質であるとは信じない」[12]。外界の対象はわれわれから独立かつ異質である（事物）。われわれの意識と異質ではなく、それゆえ意識から独立した存在をもたない（表象）。このような二項対立に陥る概念編成を改めるためにイマージュは導入されたのである。「イマージュ」がベルクソンの直観が生み出した、既成概念を越えるとされる概念であることは、『記憶』の中で「直観」の語が登場している次のテクストからも証される。そこでは、イマージュの導入とそれを中心に展開される議論によって、「実在論と観念論の間で争われる問題は、いつまでも形而上学的に議論されるかわりに、直観によってきっぱりと解決されるはずである」（MM, 72）と述べられている。

以上から、イマージュが流動概念であることをもくろんで導入されていることは明白である。では、イマージュはどのような点で流動概念として機能しているのだろうか。イマージュの「流動性」とはいかなる点にあるのか。イマージュはその目論見どおり、事物と表象という既成概念を改編しえているのだろうか。あるいはいかにしてそれらを改編しているのだろうか。これらの点を見究めるには、これらの概念を中心にしてそこから導き出されるさまざまな帰結から

成る考え方の全体を検討しなければならない。流動概念とは、こうした実在の流動的な語り方において中核をなす概念であると考えればよいであろう。言い換えれば、流動概念はそれだけではなく、それを中心にして展開される一連の考え方の文脈において理解されるべきなのである。次にそうした文脈の中で「イマージュ」が流動概念であるゆえんを明らかにしてみよう。

そのような文脈の第一は「問題の新たな定式化」である。既成の問題を新たに定式化し直すことは、既成のものを超える直観の表現形態の一つである。「それ〔直観のもたらす根本的に新しい観念〕によって、解決不可能とされていた問題は、解決されるだろう。あるいはむしろ、決定的に消滅させられるか、異なったしかたで立てられるかして、解消されるだろう」(PM, 32. 〔 〕内は引用者による)。なぜなら、対立する哲学学派がいつまでも争い続ける問題は、彼らが「問題を立てるために選んだ人為的な用語(PM, 214)」の産物であるからだ。このような用語を「新しい観念」で置き換え、問題を作り変える、あるいは「発明する」ことによって、それは解決ないし解消されるのである。(PM, 51)。そして問題を「発明する努力は、きわめてしばしば、問題が提起される用語を創り出すことにある」(PM, 52)。そのような用語の役割を担うのが流動概念に他ならない。それゆえ、「イマージュ」がいかなる意味で流動概念であるのかを知るには、それが問題を新たに定式化し、解決し難いとされていた問題の解決ないし解消に導く過程を見なければならない。

『記憶』の論述を見てみよう。主観と客観の関係については、従来次のような問いの立て方がされてきた――「宇宙はわたしの思考の内に存するのか、それともその外に存するのか」。思考、存在、宇宙といった既成の用語が使われていることに注意しよう。ベルクソンによれば、この問題は解決しようのない言葉で立てられている。内とか外とかいうのは宇宙の部分同士の関係であり、宇宙全体について内とか外とか言っても無意味であるからだ。そこで彼は、「イマージュ」という新たな用語を使って問題を次のように立て直す。〈同じイマージュがどうやって物質界と意識界という異なる二つの体系に入るのか〉(MM, 20-1)。問題をこのように新たに定式化することによって初めて、実在論と観念論という対立する立場に共通の土俵を作ることができ、問題を解決しうる形で立てることができる。「問題は、今までとは違った立てられ方をすることによって解決される」(PM, 81)。そして言うまでもなく、この新たな定式化は、「イマージュ」という語の導入によって可能になったのである。この点からイマージュが直観の表現としての流動概念の要件の一つを満たしていることは明らかである。直観は、新しく立てられた問題という形で表現され、そのことによって逆に直観も明晰化される(PM, 31-2)[23]。そして、この新しく定式化された問題は、既成概念に代えて「イマージュ」を導入することによって「発明」されたのである。

さてこのように新たに提起された問題を解くのが純粋知覚の説である。これが「イマージュ」が流動概念であることを示す第二の文

脈を提供する。先に触れた、対立物の程度の差異による移行は、この説によって可能になる。通常の知覚から記憶の寄与分を取り除いたこの純粋状態の知覚を仮定すれば、以下のような手順で事物から表象を導き出すことができる、とベルクソンは言う。『記憶』の冒頭で、「イマージュの総体」が措定されたとき、すでに物質界は措定されたのであるから、問題となるのはここからいかに表象を導き出すかにある。ところで、ベルクソンの言うイマージュは、すでに潜在的に表象を担っている。それゆえ、知覚の導出は潜在的表象を現実化する過程に他ならない。これは、イマージュが導入されたときすでに、説明すべき課題が従来とはまったく異なってしまったということを示している。今や説明すべきは知覚の発生ではなく、その現実化なのである。従来、事物の表象とはその存在に何ものかをつけ加えたものとされていた。実在論は表象を説明する際に、特定のイマージュ（脳）が別のイマージュ（表象）を生み出すと想定せざるをえない。ベルクソンは実在論とは逆に、表象とは事物の存在から何ものかを減じたものであると考える（MM, 32）。表象はイマージュの総体を仮定した際に（この仮定は実在論も観念論も認めざるをえない）すでにそこにあるのだから、イマージュを「生み出す」必要はなく、イマージュの総体のうちに潜在的に含まれている表象を「限定」によって浮き彫りにするだけでよいと考えるのである。この限定を行なうのが可能的行動である。イマージュはそれ自体としては、他のあらゆるイマージュと連帯し合っているが、生体はそこから自らの利害にかかわりある作用だけを、その可能的行動によって「選択」あるいは限定する。すなわち、表象とは事物から生体にかかわりのない作用を減じたものなのである。「私は物質をイマージュの総体と呼ぶ。そして物質の知覚とは、ある特定のイマージュ、すなわちわたしの身体の可能的行動に関係づけられたこの同じイマージュである」（MM, 17. 傍点引用者）。

同じイマージュが、物質界とそれについての私の知覚という両体系に入るという点が、流動概念としてのイマージュの眼目である。事物であるのと同じイマージュが限定によって表象に転化するのである。「事物」および「表象」という既成概念に頼るかぎり、本性上異なるとされるこの二項が互いにどのような関係にあるのかは、説明されえない。「イマージュ」の導入によって初めて、事物から表象への移行が（限定によって）可能になる。実在を二項に分け、両者の関係を理解不可能なものにしていた既成の思考枠組みを、流動概念は改編するのである。イマージュが事物と表象の二元論を超えているのは、この点である。事物と表象は（純粋知覚においては）質的に異なるものではなく、どちらもイマージュの「関数」なのだ。（だからこそ、ベルクソンは物質がおこなう「中和化された」知覚について語ることができる（MM, 33）。）異なる二つのものを同一物の「関数」として捉えること、これがまさに流動概念の流動性の内実である。

第一のタイプの流動概念のもうひとつの例として、「原初的類似」（この命名は筆者による）を挙げることができる。一般観念を説明する際に、唯名論は外延ないし類似から、概念論は内包ないし一般

性からそれぞれ出発する。しかし、このような既成概念では一般観念を説明することはできない。類似を把握するには一般化することが、また一般化するには類似を把握することが不可欠であるからだ。ベルクソンは、われわれが出発するのは「原初的類似」、すなわちもろもろの対象が共通にもつ利害を感じ、それに反応するという身体的類似であるとする。この第三の項から、悟性の働きによって一般観念が、記憶力の働きによって個別的知覚が導き出されるのである。

第二の種類の流動概念の例としては、まず第一節で述べた「媒介的イマージュ」を挙げることができる。簡単に振り返っておけば、われわれは哲学者の直観をそのまま把握することはできないので、概念と直観を仲介する媒介的イマージュに頼るのであった。それは「今だ目に見えるという点ではほとんど物質であり、もはや触れられないという点ではほとんど精神である（PM, 130）」とされている。媒介的イマージュは、その名が示すとおり直観と概念を媒介するものであるが、対象を物質か精神かのいずれかに排他的に分類する既成の思考枠組みの改編でもある[14]。

純粋記憶から記憶イマージュを経て、感覚へと至る歩みも、このタイプの流動概念に挙げることができる。連合主義は、想起の過程を説明する際に、知覚と弱い知覚としての過去のイマージュの二項しか区別しない。その結果、記憶が現実化するにつれてなぜ感覚に融合しようとするのかも、どうして弱い知覚が記憶と混同されることがないのかも説明できない。これに対してベルクソンは、第三の項として「純粋記憶」を区別する。記憶イマージュはこの純粋記憶に由来するゆえに、過去の刻印を帯びており、現実化の「途上に」ある潜在的状態であるという点で感覚ともはっきり対照をなす。同時にそれはイマージュであるという点で純粋記憶とも区別されるのである。そして、この三項は、「一方がどこで終わり、他方がどこから始まるか正確に言うことはできない（MM, 148）」という点でも流動的である。

『記憶』に見られる流動概念の第三の例としてわれわれが挙げたいのは、緊張と弛緩である。『記憶』の第四章で心身関係を解明すべく、ベルクソンはこの考え方を展開している。一方に、計算可能で質を欠いた量としての物質、他方に異質的な精神という既成の対立図式を置く限り、両者の関係は理解されえない。そこでベルクソンは「量」を「質」の「極限」としてとらえる。質から量へ移るには、質を否定する必要はなく、「実際上、無視しうる」にまで異質性を「薄めて」やればよい（MM, 208）。そしてこの質の希薄化は持続の弛緩によってなされる。量と質は互いの否定によって定義されているのではなく、一方は他方の「極限」なのであって、だからこそ移行が可能なのである。この極限にまで希薄化した質こそ、純粋知覚に他ならない。ここには明白に微積分的思考が働いている。

われわれは今や流動概念を次のように定義できる。流動概念とは、(1)異なる二項をその関数として捉える、あるいは一方を他方の「極限」として捉える、あるいは二項を媒介する概念であり、(2)そのことによって既成のカテゴリーを改編する概念であり、(3)その結果、

擬似問題を解決できる問題に再定式化する、あるいは解消する概念である[15]。

結論

ベルクソン的直観とその表現への歩みは、概念的表現の排除ではなく、既成概念を鋳直して流動概念を「発明する」営みである。流動概念とは、単に生成変化を捉えるというだけでなく、異なる二項の対立を解消させるような概念装置である。

ベルクソンの流動概念は、従来の研究ではほとんど検討されてきていない。本稿では、パリアントの論述を参考にしつつ、流動概念を三種類に分けてその成り立ちを見きわめた。本稿がベルクソン解釈に新たに付け加えたものがあるとすれば、この点である。

本稿が取り組んだ問いは、ベルクソンの「直観とは何か」ではなく、「直観はいかに表現されるか」であった。従って、次の問いは本来ここで問わなくてもよいものかもしれない。しかし、今までの論述と関係のある範囲で最後に簡単に扱っておきたい。

その問いとは「直観はいかにして得られるか」である。言い換えれば、力動図式の頂点である「意味」あるいは実在の「ヴィジオン」にわれわれはどうやって到達するのだろうか。答えは、一見逆説的であるが、分析と既成概念による実在の再構成によって、である。実在を分析し、再構成しようと繰り返し試み、ついにそれが不可能であると知ることがわれわれを直観へと導く。このようにして「実在に慣れ親しむ」ことが直観の獲得に先立つ作業として不可欠である。従って、直観は手ぶらの認識者に天啓のように与えられるものではない。言語を媒介せずに、いきなり実在と合致することでもない。「実在の曲折」に既成概念が合致していないことを、言語を媒介せずにどうして識ることができようか。ここからわれわれは、直観の獲得とその表現とは、既成概念による実在の分析と再構成を前提とし、にもかかわらずそれらを超え、さらに実在の曲折に忠実な表現へと至る営みであると言うことができるのである。

※ ベルクソンの著作からの引用略号は以下の通り。

(MM) *Matière et Mémoire* (1896)

(ES) *L'Énergie Spirituelle* (1919)

(MR) *Deux sources de la morale et de la religion* (1932)

(PM) *La Pensée et le Mouvant* (1934)

(M) *Mélanges*, P. U. F. (1972)

〔注〕

(1) Papanicolau, A. & Gunter, P, (ed.), *Begson and Modern Thought : toward a unified science*, Harwood Academic Publishers (1987), p.7.

(2) この点でも『入門』には反対の見解を示唆するテクストが見られる。「わたしが〔わたし自身の流れから得る独特の〕感じを表現する必要はもはやない。」しかし、以下に見るように、『哲学的直観』に至ってこのような見解は修正される。

(3) ここから会話に対するベルクソンの批判も生じる。cf. PM, 86-92. MR, 282も参照。

(4) ただし、これは単に日常の「用語」を拒否して、新奇な専門語を採用することではない。「実際には、いかに深く繊細であろうとも、あらゆる哲学の観念は万人の言葉で表現できるのである」(M, 1000)。また、ベルクソンによると、日常概念から得られる功利的認識を排除しているという点では、実は科学も変わりない。「どちらも、日常概念のうちに貯えられ、言葉によって伝えられる漠然とした認識を排除しているだろう」(PM, 44)。

(5) 「形而上学は記号なしですまそうと望む学問である」(PM, 182)。「第二の認識方法はいかなる観点も採らないし、いかなる記号にも支えられない」(PM, 178)。「第二の認識方法」とは言うまでもなく、直観である。

(6) この命名はヴィオレットによった。次を参照。Violette, R., *La Spiritualité de Bergson*, Privat (1968)。

(7) 『入門』でも、さまざまなイマージュを使って、そのどれもが直観に取って代わるのを防ぎつつ、それらのイマージュが直観を指し示すように収斂させる営みが語られてはいた(PM, 185-6)。

(8) 直観の表現過程が「知的」な努力であるとするところに矛盾が感じられるかもしれない。しかし、ベルクソン自身の言によれば、「知性」の語が直観と対置させられるような狭い意味で使われるのは、一九〇七年の『創造的進化』以降のことである(J・シュヴァリエ『ベルクソンとの対話』仲沢紀雄訳、みすず書房、一九六九年、p.137参照)。それゆえ、『努力』論文で「知的努力」、「知性作用intellection」と言われるときは、この限定以前の広い方の意味で使われているのであって、そこでの知性は思惟と差がない。

(9) Mourélos, G., *Bergson et les niveux de réalité*, P. U. F. (1964).p.72

(10) Pariente, J-C., *Le Langage et l'individuelle*, Libraire Arm-and Collin (1973) p.27

(11) ベルクソンにとって、空間的な思考法とは、眼に見える形で具体的に表されたものによって考えるということではない。もしそうだとすれば、彼があれほど「具体的なもの」に執着し、直観の表現として「われわれを具体的なものに留めるという利点をもつ」イマージュを推したのかが分からなくなるだろう。彼が排斥した空間性とは、移行を容れない排他性、または同じことだが固定性であって、具体性ではない。そしてベルクソンにとって具体的なものとは、流動的なものなのだから、具体性とは流動性のことである。ラヴェッソンに託して「イマージュの流動性」(PM, 256)が語られるテクストがそのことを証している。イマージュの具体性、すなわち流動性は、既成概念の固定性ないし排他性に対置されている。それゆえ、「緒論II」で「イマージュを付加した概念」(PM, 45)について語られるとき、それは流動概念、すなわち既成概念による相互排他的で固定的な分類を改編する概念のことを指しているのだと考えられる。(もちろん比喩(イマージュ)は、このようなカテゴリーの改編にはきわめて有効な手段であるのだから、「イマージュを付加した概念」とはテクストで語られているように比喩的概念でもある。)

(12) Theau, J., *La Critique bergsonienne du concept*, Privat (1968) p.152. ただし、原文はすべてイタリックスである。

(13) 直観のもたらす観念が最初は漠然としているが、使われるにつれて明晰化するというこの過程は、科学においても同様に見られる。ベルクソンは、注(2)で指摘した点に続いてこの点でも形而上学と科学に差を設けていない。PM, 223を参照。

(14) この媒介的イマージュは第二節で見た力動図式と密接な関係がある。というのも、媒介的イマージュは、記憶を想起するためであれ直観を把握するためであれ、どちらの場合にも、われわれが取るべき態度の「合図」ないし「指示」を与えるものだとされているからである。PM, 130およびES, 161参照。

(15) この他にも、ベルクソンの著作には、概念にまでは至らなくても、流動的な語り方が、言わば流動概念を取り巻いてその流動性を側面から支える語り方が数多く見られる。例えば、知覚は「生まれかけの」行動であり、記憶イマージュは「生まれかけの」知覚である。あるい

は、さまざまな機会に登場する「どこで一方が終わり、どこから他方が始まるか言うことはできない」という言い回しなどがそれに当たる。